

サウジアラビア：カタコンベに追いやられたキリスト教徒

西欧世界ではイスラム教徒は、宗教の自由が認められ、多くの都市にモスクを持っている。他方、シリア、カタール、オマーンなどのイスラム教徒が大部分を占める国々も少なくとも公式には他宗教を尊重する。しかし、他のイスラム国は異なる。イスラム発祥の地サウジアラビアでは、一つの教会も存在しないし、建設も禁じられている。また家に福音書を持つことも、小さい十字架をもって歩くことも。・・・

イスラムの発祥の地であり中心地であり、建前は欧米の同盟国であるサウジアラビアは、キリスト教徒だけでなくワッハーブ派イスラム教以外のいかなる宗教の信者に対しても最も厳しい国であろう。

公式にはキリスト教徒はこの国には存在しないことになっている。しかし、事実はキリスト信者の数は少なくとも80万人（人口の3.7%）。その大部分はフィリピンからの出稼ぎ労働者で、この他インド、韓国、エジプト、バングラデッシュ人もいる。

アメリカ合衆国の「世界における信教の自由促進委員会」が出す”Report on Saudi Arabia”は、同国で見られる不法、差別行為として、礼拝やワッハーブ派以外の宗教行為の禁止、イスラム教えが薦めていない服装やシンボルの禁止を挙げている。また外見からイスラムでないとわかる聖職者の入国も認めていない。この報告書は、同じように私的に宗教的行為をしたという理由でキリスト信者が迫害、逮捕、拷問、国外退去などの扱いを受けること、そして政府の援助を受けた学校での教科書や、モスクでの説教、マスコミの報道にキリスト教徒、ユダヤ教徒、そしてワッハーブ派以外のイスラム教徒に対する威嚇的、差別的な表現が見られると非難する。

イスラムの保護者

2001年の7月から9月にかけて、ジッダの町において様々な国籍からなる14人のキリスト信者が不法に逮捕、監禁された。それは「キリスト教家庭のネットワーク」に対する精力的な取締りであった。彼らの多くが牢獄の中で非人間的な扱いを受け、何人かは殴られ、全員が繰り返し繰り返し尋問を受けた。その一人、インド人の Prabhu Isaac は自分が投獄されていた Bremen の牢獄の非人間的な条件を次のように述べる。「監獄は最大400人が収容できるくらいの大きさだったが、そこには1200人の人間が詰め込まれていた。座るのも困難で、横になることもできず、便所は全員のためにたった3つしかなかった。そこには犯罪者とエイズのような病気を持つ人間で一杯だった。水は一日に二回、午前中に一度、午後一度、しか飲めなかった。それは身の毛もよだつところだった。21世紀にイスラム世界の代表的国にあのような場所があるなんて想像できなかった。」

この14人は6ヶ月間牢獄で暮らした後で、2002年3月国外追放となった。留置されていた間、彼らは家族とも弁護士とも、自国の領事館とも連絡を取ることが許されなかった。

サウジアラビアはイスラム教の二つの聖なるモスク（メッカとメディナにある）の保護者を自負する。そのために、全国土の「聖性」を保持するという特別な責任を担うと考えている。この考えによれば、イスラム以外の礼拝を許可することは、それを「挑戦」と受け取る全世界のイスラム教徒を敵に回し、自国のイスラム教徒の感受性を逆なですることとなる。上記の報告書は、「サウジでイスラム以外の礼拝を認めても、イスラム教徒が侮辱を感じるには言い切れない。事実、イスラム世界の広い地域に教会や会堂や他の宗教の礼拝所が存在している。・・・この問題はサウジの政府が宗教的寛容政策を促進することで解決できるだろう。しかしながら、この国の教育制度も、マスコミも、公式の宗教的組織のいくらかも、非イスラム教徒とワッハーブ派以外のムスリムに対する非寛容の精神を煽っている。」

サウジアラビアは正式の憲法を持たない。1992年ファフド王が「基本法」を発布したが、これはコーランとスンナ（マホメットの伝え）を国家の憲法と、そしてシャリーア（イスラム法）を政府の方針である宣言している。この「基本法」は、勝手な逮捕、迫害、家屋への不法侵入を禁じている。しかし、当局がこの法律を無視するのは日常茶飯事だ。その上、「基本法」には信教の自由を保護する条項はまったくない。

棄教（イスラム教を捨てること）または他宗教への改宗は死罪をもって罰せられ、冒涇を言ったとされる者は逮捕される。外国人によれば、このシステムのために、サウジの会社では、経営者が冒涇罪などの偽の訴えによって、何の遠慮もなく社員に正当な権利を放棄させることができるようになっている。

カテコンベに逆戻り

2000年1月7日、16人のフィリピン人が逮捕された。その中には女性も、2歳から12歳の子供もいた。彼らがリヤドのアパートで一緒に福音書を読んでいたとき不意を打たれたのである。また別のフィリピン人の労働者 Donnie Lama は家でミサに参加したという理由で18ヶ月捕囚生活を強いられた（1995年10月から1997年3月）。彼が釈放されたのは、ただ国際的な人権団体の圧力による。祖国に送還される前に、70回の鞭打ちの刑を受けた。

近年サウジ政府は、同国のすべての住民に対し、私的に各自の宗教を实践する自由を認めるという立場を表明したが、実際は、多くのキリスト教徒が個人の家で宗教的行為をしたがために、数ヶ月も監禁され、投獄され、殴られ、国外追放に処せられている。大多数のキリスト信者はこのために一種のカタコンベの状況に逆戻りしたと言えよう。普通は信者は人目につかないように日曜日には集まらない。当局の目を逃れて秘密裡に集まらねばならないため、並大抵ではない努力を強いられている。

他方、キリスト教の祝祭を祝うこともご法度で、電話でクリスマスの祝いを述べることもできない。その一方ではラマダーンの断食月に敬意を払わねばならない。イスラム教徒に布教することは違法で、厳罰に処せられる。

「ムタワア」と呼ばれる「徳の保全と悪徳の抹消のための委員会」がある。それは4500人からなる「風紀と宗教の健全性」を見守る警察であり、全市民に宗教上の義務の履行を要求する。ムタワアは市民の服装や行動を監視する。

この警察は、勝手に個人の家屋を捜索できるようで、その権限の範囲ははっきりしていない。強制力を持ち、適切な手続きなしに人を逮捕することができる。合衆国の国務省は、2002年の「信教の自由についての年報」において、ムタワアと他の独立した宗教的監視人によってとられた行動として「市民や外国人の執拗な追求、愚弄、殴打、逮捕、拘禁」を挙げ、「多くの外国人の女性は、ムタワアを恐れて戸外に出ることを憚っている」と言っている。

非人間的な扱い

サウジアラビアでの外国人が受ける待遇は、各自の国籍、仕事、性、住所によって異なる。発展途上国 フィリピン、インド、バングラデッシュ、スリランカ、アジアとアフリカの他の諸国 からの人々は、欧米人に比べて断然悪い待遇を受け、またより強い制限を受ける。他方、「アラビア・アメリカ石油会社」のような特別な総合体に住む人たちは、よい幅広い信仰の自由を認められている。合衆国の外交官も同じだ。

秘密裡に共同の祈りに参加していたという理由で逮捕されたと記録に載っているキリスト信者の数は数百に上るが、これは記録に載っていない同様のケースがその何倍もあるということ推測させる。と言うのは、貧しい国からの移民はそれを告発することを恐れているか、その方法がないからである。

逮捕監禁の後釈放されたフィリピン国籍の Dennis Moreno-Lacalle は、釈放前に通訳とも弁護士ともフィリピン領事館の職員とも連絡をさせてもらえないまま、アラビア語で書かれた文書にサインすることを強制されたと宣言した。彼の証言によれば、地下牢に13日間閉じ込められ、自由になりたければイスラムに改宗せよと警察から言われた。また2002年1月28日にエチオピア人のキリスト教徒3人が暴行を受けた現場も目撃した。

合衆国の国務省によると、2002年4月の間に、リヤドにおいて少なくとも26人のキリスト教徒が、私宅で宗教行為をしていたところをワタワアの急襲を受け逮捕の憂き目にあった。翌月にはジェッダ とリヤドにおいてエチオピアとエリトリア出身の11人のキリスト教徒が、「公の礼拝を制限する法規を破った」という口実で逮捕された。9月にはその大多数は国外追放に処され、残りは罪状を明らかにされることなしに釈放された。この種の事件は枚挙に暇がない。

不寛容を煽る

「サウジアラビアの教育制度では、生徒と保護者の信条とはまったく無関係に、すべての子供に等しくイスラムの公式の解釈が教えられる。この国の教育制度のカリキュラムと教科書は不寛容を煽っていると指摘する専門家もある。中等学校のプログラムの30～50%が宗教的内容のものである」と、前述の「世界における信教の自由促進委員会」の報告である。

最近の調査によれば、同国の文部省が発行している教科書には、攻撃的で差別的な表現のほかに、いくらかの場合は他の宗教に対する憎しみを助長すると指摘されている。中でも、キリスト教とユダヤ教は、保護するべきでも模倣するべきでもない、「不信心者で、イスラムの敵」という表現が繰り返し出ている。彼らを「豚」と「猿」と呼んでいるものがあった。ユダヤ民族は、頻繁に買収、詐欺、裏切り行為を得意とする邪悪な民族として紹介されている。

このほかに、モスクやマスコミの手段（大部分が政府の統轄下にある）においても他宗教に対する攻撃的で不寛容を煽るメッセージを見聞きできる。「キリスト教徒とユダヤ教徒は不信仰者で、アラーの敵である」、「神よ、暴虐なユダヤ人を滅ぼしたまえ」、「イスラム教徒は子供たちを、彼らが聖戦に志願するように、そしてユダヤ人を憎むように育てなければならない」などなど。

A.I.N.の『2003年白書』は、「サウジアラビアの新聞には、ヘブライ人とその宗教に対する強い嫌悪が存在する」と確証している。たとえば、2002年6月7日、Muhammad bin al-Shweiy'ir は"al-Yazira"紙に次のように書いた。「アラーの神は、ユダヤ人が辱められ、のろわれるようにお決めになった」と。

「教会は存在しないであろう」

国際社会　とりわけ、建前はサウジの同盟国であるアメリカ合衆国　がサウジに同国のすべての住民に信教の自由を認め、不寛容を促進する教育を止めるように圧力をかけているにもかかわらず、現在のところ、目立った変化はない。おそらくサウジが全世界の石油備蓄量の25%を持っているところから、欧米諸国が及び腰であるためかもしれない。ただし、インターナショナル・アムネスティーはサウジアラビア王国を「テロと不正」の体制と規定したが。

国防大臣 Ibn Abd Al-Aziz は今年の3月、同国に教会を禁止する方針にはいかなる変化もないと断言した。「我々は他の宗教にいかなる反感も抱いていない。しかし、この国にはかつて、今も、将来も教会は存在しなかったし存在しないであろう」と。

PALABRA 475, X-03 (599), pp.64~67